

多田 顕 著

## 『武士道の倫理』

——山鹿素行の場合——

豊 嶋 建 広

本書は、多田顕氏による「武士道の倫理——山鹿素行の場合——」および編者である永安幸正氏の「二つの武士道——山鹿素行と新渡戸稲造——」からなる。「武士道の倫理」の内容は、多田顕氏の山鹿素行の倫理と政治経済に関する三論文がまとめられた倫理学と政治経済論の体系である。そこには武士階級の倫理道徳に加え、藩および幕府の経営に関する指針が説かれている。「編者解説 二つの武士道——山鹿素行と新渡戸稲造——」では、山鹿素行と新渡戸稲造の武士道の解説、双方の武士道の徹底した比較検討、そして武士道を現代に活かす道が模索されている。本書では読みやすいように漢字にルビが施され、改行・行空け・句読点の加筆などの工夫

がなされている。以後、「武士道の倫理——山鹿素行の場合——」、「二つの武士道——山鹿素行と新渡戸稲造——」について著者達の主張を中心にみていこう。

「武士道の倫理——山鹿素行の場合——」の第一編は「山鹿素行の武士道体系」である。山鹿素行は、江戸時代前期の民間儒学者であり、古学の最初の提唱者および兵学者である。著者によれば、「素行の功績の一つは、兵学を単なる戦闘術から修身・齋家・治国・平天下の経世の学が高め、兵儒一致の新しい武士道を完成させたことにある」。その武士道とは「江戸期太平の世において、戦国武士道とは異なつた士道即ち君子道という儒教々理に基づく新しい武士道である」。そして「素行は、武士が不生産階級でありながら、生産階級である農工商の三階級に対する支配階級であるという自覚の必要性、武士は文武両道をおさめて人倫即ち五倫（人としての在り方、行為の仕方）を實踐すべく努力し、三民（農工商）の師表となることの重要性を力説した」。

第二編の「武家社会の国家と郷土造り——政治経済倫理——」は、素行の政治経済倫理に関する議論である。著者は「素行の政治経済論は、単に事実を述べるのではなく、倫理という観点を導入して、孔子孟子など、古代の儒教の理想とする国家社会と、指導者の特性と実行すべき事柄の枢要点を描写する政治経済倫理でもあり、国

家全体と、藩という郷土と、家の倫理と、リーダーの備えるべき特性を探索している」と主張する。

第三編では、「義利の論と私益公益論——素行とスミスの比較」である。著者によれば、「私益と公益の調和」の問題は、経済にとって、時代・体制を越えた永遠の課題であり、素行の緒論は、アダム・スミスと共に今日省みられるに値するものを持っている」。そして「スミスの『国富論』における樂觀的な私益公益一致論に対して、素行は私利を是認し、これに積極的意義を付与しているが、私益即公益とは肯定してはおらず、後天的な教育により利欲が節せられ、方向づけられ高められることにより、義（公益）と利（私益）とが一致すると説いている」。

「二つの武士道——山鹿素行と新渡戸稲造——」の一、二では「山鹿武士道の全体構成とその倫理の内実」が記されている。著者は、「山鹿素行の武士道論は、古代儒教流の武士道であり、仏教的要素はできる限り排除され、神道的な要素は、理論の核心部分に位置づけられていない」と特徴づけている。さらに「素行の武士道は、政治経済学をその一部に包むものとしての武士道の体系であり、国家社会のリーダー学としての君道（君主・君子の踏むべき道）を含んでいる」、そして「江戸時代の君主の道とは、政治行政の全体系を扱うものであり、農

工商と武士からなる四民の福利と安寧を実現する任務を達するために存在する」と解釈する。

三、「新渡戸稲造『武士道』の場合」においては、著者の新渡戸武士道についての見解が以下のように語られている。「新渡戸武士道は平時となった江戸時代に成立した武士道というだけではなく、武士という社会階級そのものが地上から消えて居なくなった明治時代、一つの道德体系として回顧され反省された武士道論であり、それは新たな精神（キリスト教）の土台の上に養育しなければならぬ武士道論である」と。

四、「武士道の比較論へ」においては、山鹿武士道によって語られ、新渡戸武士道によって語られなかった「孝」について、著者は多くの紙面を割いている。その中で著者は「新渡戸武士道には、忠（義）の解説は行われるも、孝（行）については解説されていない。日本武士道では『孝と忠は一貫する』と理解されるものであり、新渡戸博士が武士道の中核として重視した主君への『忠義』は、それゆえ孝を抜きには行われぬ」と指摘し、「新渡戸博士が一八九九年の『武士道』において、孝行論を無視したのは、一大欠落であり、山鹿素行による本物の武士道を繕くことを通じて、この欠落を乗り越えなければならぬ時である」と主張する。

五、「武士道を活かす道」における、著者の論はこう

である。「新渡戸博士の武士道は世界宗教、殊にキリスト教による基礎づけなしには、もはや現代に活きない。しかし、武士道は、古代に芽生え、日本の歴史の異なる段階を貫通して、現代にも、さらに将来に役立つ文化要素を豊かに蓄えている」。さらに著者は「明治維新で身分としての武士階級が消滅した以後も、神道的、仏教的、儒教（道教）的な武士道が、普遍的な人間の思想として、かつ修養として、道徳として存続し得る根拠があるのではないか」と問いかけている。

本書は武道をライフワークとしている私にとって、まさに目から鱗の一冊である。各界のリーダー、武道関係者にはぜひ一読をお勧めする。